
不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

トロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

【Nコード】

N6548Y

【作者名】

トロ

【あらすじ】

自他共に認めるヤンキーの早森いなほは、ある日死の運命にあった少年の運命を変えたことに目をつけられ、謎の男に異世界に吹き飛ばされた。

元の世界にはいなかった人の天敵である魔獣、そして魔力を用いて使われる魔法の存在。ファンタジーと呼ばれる世界にて、いなほにあるのは己の五体が唯一つ。

唸る筋肉！暴れる筋肉！異世界ファンタジーなんのその。男ひたすら拳を固め、貫き通すは我が信念。無茶と無謀を笑われようが、鋼

の肉体漲らせ、筋肉馬鹿が我が道のみ行く。
端的にまとめると、荒唐無稽マッスルファンタジーです。よければ
一読のほうをよろしくお願いします。

第一話「祈る少女とぶっ飛びヤンキー（軽傷）」（前書き）

筋肉って凄い。全編通してそんな話ですのでご注意を。

第一話「祈る少女とぶっ飛びヤンキー（軽傷）」

別に現実を理解していないわけではない。

ただ単純に、藁にすらすがらなければならぬほど、現実が冷たいのだ。

「願いを捧げる。私の夢、私の理想、あなたを象る全てが、私の願いという血肉で成る」

少女は大地に膝をつき呪文を歌っていた。彼女の膝もとは、土の大地に描かれた下手くそな魔法陣が一つ。北に太陽を書き、西に盾を示し、東に剣を描く、そして南に少女が一人。中央には東西南北を繋ぐ星の印。

それは、ありもしない魔法陣と呪文だ。だが少女がそんな新しい魔法陣と呪文を生み出したのかと言えば、そうではない。少女は簡単な魔法こそ使えるが、せいぜいはちょっとした炎をともしたりといった程度、召喚を行えるほど、ましては新たな魔法を使えるほどの卓越した魔導師ではない。

「理想を紡ぎ、理想と化せ。あまねく悪をかき消す光、祖は太陽、其は無限の勇気を抱く奇跡」

だが詠唱は続く。両手を組んで胸の前、祈りを捧げる少女がまとう衣服はただでさえぼろの上、土で汚れて水ぼらしい。体にはいくつもの擦り傷、そして足首は痛めたのだろう、青く腫れているが、それらの傷の痛みを押し殺し、少女は意味のない詠唱をひたすら綴る。

少女は逃げてきた。平和な日常の中、ある日突然村を襲撃してき

た巨大な魔獣、トロールの群れに追い立てられ、少女は家族、友人、全てに守られ逃げおおせた。魔獣の群れにより鮮血に溢れることになった村から逃げ、森に入り込み、ただ闇雲に走った。そしてつい先ほど、森まで追い立ててきたトロールにより、少女は友人と家族と引き裂かれ、一人孤独に逃げ続け、ついに足首を痛め大地に屈したのだ。

自分は無力だ。か細い腕に足、魔法を使えるほどの魔力もないただの少女。そんな自分に何ができるわけでもない。でも助けたかった。助けてほしかった。この理不尽を救う奇跡が欲しかった。

「其の総称は人の夢。其の理想は世界の夢。大いなるあなたよ、大いなる奇跡よ、この身、この言霊に応えたまえ」

詠唱は続く。だがその詠唱は、今少女の横に置かれた誰とも知らぬ人が書いた『絵本』に記されたものだ。そう、それはただの御伽話の言葉に過ぎず、どんなに願おうが祈ろうが、その全てに意味はない。

だが少女は歌う。歌うように祈る。藁にもすがろう。藁にしかすがれないから、藁にだってすがってみせよう。

絵本の名前は『太陽の勇者』。悪の魔王を打倒する偉大な勇者の物語。そして、少女が歌う詠唱と、下に描いた魔法陣こそ、絵本に出てくる勇者召喚の召喚魔法。

不可能である。出所不明の絵本の在りえない詠唱に意味はない。

詠唱は続く。でも少女にはこれしかなかった。小さなころから、手垢で汚れても読み続けたこの理想の英雄に願うしか、少女には残されてなかった。

だから祈る。お願いと、どうか奇跡よ起こってくださいと。

「誓約は今。応えよ、応えよ、奇跡を具体せよ。この世界に光をもたらせ」

お願いします。それだけが、弱い少女にできる唯一の抵抗だから。

「太陽の勇者よ！」

来て！ 両手に力を込める。だが、どんなに待っても、少女の描いた魔法陣には何かが起きるわけでもなく、響くのは森の木々のざわめきばかり。

「そんな……」

わかっていたけれど、それでも奇跡のない現実には少女は今度こそ力を失った。組んだ両手は力なく大地につき、絶望感が少女の肩に重くのしかかる。

現実の理不尽を打倒する奇跡の存在はない。世界はいつも冷たくて、少女の穏やかな日常を守ってくれる英雄はいない。

「どうしよう……お母さん、お父さん、エイミー、トト……」

溢れる涙は、彼らへの罪悪からだ。何もできなくてごめんなさい。弱くってごめんなさい。

私には何もできない。圧倒的な力を前に、私はただただ逃げるだけしかできないんだ。

少女の中の芯が砕ける。犠牲にして逃げるだけの己への自責の念に潰されそうになる中、不意に木々のざわめきではない、木々をへし折る音が聞こえてきた。

それは膝をつく少女にどんどん近付いてくる。そして、最早動くこともできない少女の前に、音の主は現れた。

「あ……」

悲鳴すらあげられない。少女の前に現れたのは、少女の倍以上はあろうかという巨体の、緑色の皮膚をもつ異形の怪物。トロールと呼ばれる魔物は、恐怖に震える少女を見下ろして、手に持つ棍棒を見せびらかすように掌で弄ぶ。

トロールを見て、少女の記憶が掘り起こされる。突如群れをなして村を襲撃してきたトロールの群れ、駐在していた兵士は闘うでもなくなさけない悲鳴をあげて一目散に逃げ、村の人々が次々と死んでいく地獄が具現した世界。それでも母親や友が自分をここまで逃がしてくれたこと。

「嫌だ……」

立ち上がれもせず、後ずさる。足首の痛みのせいか、最早起き上がることさえ難しいのが見て取れた。森のなかで転び、運悪く木に打ちつけてしまったときの怪我だ。これがなければ、少女はひたすらに逃げていただろう。

だがもう逃げられない。運悪くトロールに見つかった今、少女を守る優しい母に、頼もしい友人達がいない以上、少女の命運はすでに決まっていた。

「グビヤビヤビヤビヤ」

汚らしい鳴き声をあげながら、トロールがジリジリと少女に近づく。あくまでゆっくりと、絶望に沈む少女を見て楽しむように。

だがそんなトロールの下衆な思考など理解する余裕のない少女は、必死に後ろに下がるしかできない。大地に刻んだ魔法陣が後ずさる度に少女の体で消されていく。まるで願った奇跡はただの張り子であると言わんかのように、呆気なく消える少女の理想。

一歩踏み込んだトロールが、少女の絵本を踏みつぶした。踏みに

じられ、蹂躪される少女の夢、理想。ありもしない奇跡に意味はない。世界はどこまでも理不尽で、この世に奇跡をもたらす勇者はいない。

「嫌だ……」

「ゲヒヤヒヤヒヤ」

「嫌だ……！」

次々に零れる涙。否定しても迫る悪夢。と、少女の背中がついに木にぶつかつた。これ以上逃げられない。絶望と恐怖、嫌だと言おうが、トロールはその醜悪な容貌に笑みを張り付けて少女に向けて手を伸ばし

「誰か、助けて！」

吐き出される生への渴望。か弱い少女の、最後の抵抗。

瞬間、何の前触れもなく、トロールの手が横合いから伸びた手に掴まれた。

早森いなほは人類である以前に、喧嘩しか能のない糞つたれの畜生であると豪語するくらい、見た目も中身も筋金入りのヤンキーだ。茶色に染めて痛んだ短髪に、眼力鋭い目つき、二メートルに届くか

という長身の彼は、道端であえば誰もが道を譲るほどの威圧感を放っていた。

何よりもその威圧感の元となっているのは、鋼か何かと見間違っくらしい屈強な筋肉だろう。世間的には細マッチョと言われるような、厚すぎない筋肉だが、筋の一本まで丹念に鍛えた肉は、そこらの鉄なんかよりも遥かに頑丈である。実際はただの細マッチョなどではない。見栄えだけの余分な筋肉を搭載しない、戦いに特化した攻撃的肉体こそいなほの自慢なのだ。

そんな男が、まさか積載量一杯の十トントラックに轢かれそうになった少年を庇って轢かれ、さらに吹き飛んだ先で落ちてきた鉄骨に潰されたあげく、鉄骨をどけようとした瞬間ガス爆発に巻き込まれたのはなんという悲劇か。

ともかく何の気まぐれか、いらん正義感を発揮したいなほは、まるで少年を確実に殺そうとした連続攻撃を代わりにもらって、最後の爆発で結構な深手を受け気絶したはずだった。

普通は死んだと思うようなダメージの連続だが、いなほは自分が事故などというしょうもないことで死ぬなど考えもしなかった。せいぜい『もしかしたら骨折れたかもな』程度の認識である。

だが流石の彼も目覚めたらまるで自分に怪我がなかったということには驚きを隠せなかった。しかも世界各国のあらゆる文字と、地球にはない文字がいくつも浮かんだ空間にいて、目の前にそんな空間に似合わない革製の豪華なソファーに座る、ソファーに似合わないぼろぼろの黒いマントをまとった陰鬱な面持ちの男がいるとなれば、自分の正気を疑うのも致し方ないだろう。

「あー……なんだ、これ」

ガシガシと茶色に染めすぎて痛んだ髪を掻き耄り、いなほは男の前にまで歩み出た。

「で？　こんなとこに連れ込んだのはアンタか？」

「……」

男を見下ろすが、男はいなほを見上げて視線を交わすだけで、何かを言おうとはしない。ム力つく態度にいなほの頬が引きつる。ガキの頃から喧嘩っばやく、生粋のヤンキーとして生きてきたいなほにとって、自分を無視するような態度は、すなわち喧嘩の合図に他ならなかった。ただでさえ訳のわからない場所にいるのだ。いなほの沸点はすでに振りきれていた。

「テメー」

「例えば、水が上から下に流れるがごとき覆しようのない必然、それが運命だ」

その胸倉に掴みかかろうとしたタイミングで、男が口を開いた。ボソボソした声の癖に、何故か沁み渡るようにいなほの心に響く。出鼻を挫かれ、しかも訳分らない話をしだしたとなれば、いなほの動きが止まるのも仕方あるまい。

内心の苛立ちをぶつけるタイミングを逃したいなほは、釈然としない面持ちで、男の隣の空いてる場所に大股開きで座った。男の座るスペースすら侵略して座るのはせめてもの意趣返しか。だが男は特に気にしたそぶりもみせず、淡々と、やはり陰鬱なまま口を開く。

「だが、そんな必然を覆す者がいる。因果の否定、絶対運命の改変、激流に抗う矛盾存在。しかしその資格を持つ者が、誰しも運命を覆せる力を持つわけではない。大切なのは不倒不屈の強靱な鋼の意志、これがなければ、資格を持とうが因果の否定を行うことができない。現にこれまで、資格の保有者で運命を覆した者は一人しかいなかった」

た。お前で二人になったがな」

「へー」

話している内容など、県内最底辺の高校にぎりぎり合格した程度のいなほにわかるわけがない。いなほは男の言葉は話半分に、周りの増えたり消えたりを繰り返す幾つもの文字を目で追うことに集中していた。

だが構わず男は話を続ける。陰鬱なまま、しかしどこか願うようなその口調。

「お前はあの少年の死の運命をその意志のみで打ち壊した。それで私は確信したよ。お前こそが私の望んだ者なのだと。だからお前をこちらに引き寄せたのだ」

「……おい、そりゃ」

少年とは、あの事故で庇った少年のことだろう。言ってることはさっぱりだが、知っていることならば興味はある。

「安心しろ。少年の因果の鎖は生存の方向に切り換わった。矛盾を嫌う世界の選択はそうらしい」

「なんだ、つまりガキは死んでないのか？」

「ああ。お前がそうした」

「……けっ、しぶといガキだぜ」

悪態とは裏腹に、いなほの表情はどこか穏やかだ。口は悪いが、

心より少年の安否がわかって安心しているのが見て取れた。

「……お前を待っていた」

安堵するいなほに、不意にそんなことを男が呟いた。いなほは眉をひそめる。当然だ、いなほには男との接点がるでないのだから。

「先に言っておく。お前はあの世界では死んだことになっている」

「道理が通らねえなあ。俺アこの通り無傷でピンピンしてんぜ？」

「怪我のほうはここに至る途中で私が治しておいた。軽い火傷と右肩の脱臼と骨にひびが入った程度だったのもあるが、専門外でも存外、何とでもなるものだな」

「つまりテメエが俺の怪我を治したってのか？」

「ああ、そしてその代わりに、お前にはこちらの世界に来てもらう。後は好きにやれ」

唐突な話に、いなほは言葉を失った。何を言えばいいのかもわからず、そもそもやはり言ってる意味がわからない。

当然、男はそのまま続ける。語りだすその顔は、僅かな安堵が現れていた。

「さて、今更だが自己紹介と別れの挨拶をしよう。私は第十一位『帰結運命』。名前はレコード・ゼロ。勝手にこちらに来てもらう上に身勝手な願いだが、どうか一つだけ私の願いを聞いてほしい」

突如、謎の空間に光が満ちていく。いなほはその急な変化を、何

故か当たり前のように受け入れていた。思えばそうだ、こいつの話は理解はできないし意味不明だが、何故か『受け入れられる』。

「おう。何だ」

だからいなほは、不思議と素直に男、レコードの願いを聞き入れようと思った。光に包まれ、何もかもが白に染められていくが、心中は穏やかなものだ。いつの間にかソファ―に座っている感触もなくなり、自身の肉体も曖昧になっていく。

それでも、その陰鬱な言葉は、

「世界の運命を、打ち砕いてくれ」

どうしてか、頭ではなく、心の芯に重く響き渡った。

「……」

光が消えると、文字が浮かぶ部屋の景色が戻ってきた。果ての見えない広大な空間にただ一つ置かれたソファ―には、先程まで座っていたいなほの姿はない。変わらず陰鬱な面持ちのレコードがただ一人。次々に浮かんでは消えていく文字群を見据えている。

「さよなら、いなほ。何、君がそのまま不屈なら、必ずまた出会えるさ」

紡ぐ言葉を聞く者はいない。だがそれでも呟くレコードの瞳の奥底には、薄暗い情念の炎が灯っていた。

第一話「祈る少女とぶっ飛びヤンキー（軽傷）」（後書き）

次回、ヤンキー大地に立つ。

第二話「ヤンキーばんち」（前書き）

この小説は

筋肉＞物理法則

となっています。

第二話「ヤンキーばんち」

目が覚めると太陽が眩しいくらいに頭上で輝いていた。

久しく感じたことのなかった土の感触と匂いが全身を包んでいる。涼しげな葉鳴りを響かせる森の鳴き声が心地よい。

どうやら自分は倒れているらしい。混乱するでもなく冷静に、森の中にいることをいなほは理解した。

上体を起こし、ややまどろんだ頭でこれまでを改める。

ガキを庇った俺はトラックに轢かれ、鉄骨に潰され、ガス爆発に巻き込まれた結果、レコード・ゼロと名乗った男に助けられ、ここに飛ばされることになった。

そして、ここが地球でも日本でもないことも理解していた。別の世界であるという何となくの知識がある。

異世界。そう、異世界だ。今まで自分がいた世界とは別の世界。意味はわからないが体感的に理解はした。

ようはここが日本ではなく外国という解釈でいいのだろう。

「つまりアメリカってことだな」

いなほは単純明快な馬鹿だった。

ともかく、この知識はどうやらレコードの奴がどさくさに紛れて自分にもたらしただろう。頭の中に『そのまま送るのは不便と思っただのな』というレコードの言葉が浮かぶ。

そう思うならなんで元の世界になんで返さなかったのか。別れが惜しいと思う奴も一応は何人かいるし、勝手に飛ばすのは道理が通らない等と悪態をつきたくもなるが、

「まあ、しょうがねえ」

起きてしまったことを愚痴るのは性分ではない。あいつが事故で怪我した自分を救ったのもまた事実。かつての世界に未練がないわけでもないが、こうなっては仕方ない。俺は切り替えの早いナイスな男なのだ。

などと自分を奮い立たせるついでに立ち上がる。ご丁寧に、黒のタンクトップとひざ丈の短パンにサンダルと、事故当時の格好はそのままだ。爆発で吹っ飛んだにも関わらず服装がそのままなのはいなほとしても助かる。全裸で森に置かれたらただの変態以外の何者でもないのだから。

体にも怪我ひとつない。試しにいなほは近くの木に向かって構えると、深く呼吸。サンダルを脱ぎ棄てて裸足になり、後ろ足を蹴り上げる。鞭を振るうように斜め上に走るつま先、それは木に着弾する間近、腰の回転も加えられさらに速度を増すと、轟音と共に木に叩きつけられた。

人の胴程もある幹が、いなほの蹴りの絶殺に負け、乾いた音と共に真横に折れる。その音は人外の一撃に負ける木の断末魔だ。トラツクに鉄骨、はてに爆発をもらって、ようやくちょっと危ない程度のダメージしか受けないいなほの保有する筋肉の堅牢は、攻撃という点に関しても無類の火力を与えていた。

まさに人類の皮を被った猛獣の一撃を、いなほは当然とばかりに頷き一つで受け入れた。人にはありえない戦闘能力。だがそれこそが、彼を近隣の不良、果てはヤクザすら屈服させるに至った所以に他ならない。単純な筋肉の質量と、その過程で培った格闘術こそ、いなほが絶対の信頼を置く武器なのだ。

「う、し……体はまあ大丈夫か」

それだけ確認したいなほだが、さてここで問題が起きた。そもそも、自分はここで何をすればいいのだろうか。好きにやれとレコー

ドは言っていたが、自由すぎるのも困りものだ。

せめてどっかの町にでも置けよ。とサンダルをはき直しながら内心で悪態。ともかく、早く町に出よう。ズボンの尻のポケットには都合よく財布もある。新たな世界に飛ばすとか言っていたが、いなほ的には外国のどっかに飛ばされたのかもしれないと解釈した。だとしたら財布の円では意味ないかもしれないが、そこはあれだ、いざとなったら悪そうな奴捕まえて金を巻き上げればいいだろう。

呼吸を一回。排気ガスの溢れていた世界とは違う空気を肺一杯に取り入れ、その時には頭はもう冴えわたっていた。

「おーし、まずは真っ直ぐだ。んでム力つく奴は殴って黙らして金撒きあげて唾吐き捨てる。その後は……その後だ！」

行動方針が決まれば後は早い。いなほは快活な笑顔を浮かべ、へし折れた木を跨ぎ、真っ直ぐという名の適当な行動を起こそうとした瞬間。

その進路を遮るように緑色の何かがいなほの前に現れた。

「あ？」

思わず素っ頓狂な声が出る。

のっそりと現れたそれは、まさに異形だった。長身のいなほより、さらに顔一つでかく、腰巻一枚しかつけていないその怪物は、見た目も最悪だ。遠くでもわかる異臭に、豚を醜くしたような顔、体は丸々としており、どこか相撲取りを思わせる体だ。その手には一メートル以上はある木を削っただけの棍棒を持ち、明らかにこちらに敵意を放っていた。トロールと呼ばれる、この世界でも高い戦闘能力を誇る魔獣、それが今いなほの前にいる異形の名前だ。

普通の人間ならば、こんな化け物に会ったらその怪物然とした姿に怯え、一目散に逃げ出すだろう。だが、いなほと言えば、その

姿を上から下までじっくりと観察したうえで、まるで変わらない、快活で、しかし犬歯を剥き出しにした凶相の笑みを浮かべた。

「おうおうおう！ 豚を腐らせて二足歩行にしたようなツラしやがって。デケエからって見下してんじゃねえぞ！？ ああん！？」

下から睨みつけながら、いなほが自らトロールへと歩を進める。人間には見えない生物だろうが、いなほには関係なかった。

こつちに敵意を持って現れたのならば、それが例え子どもでも女でも総理大臣だろうが一緒だ。

叩いて潰す。いなほの行動原理は単純だが、故に誰だろうがブレはしない。

トロールもいなほの戦意を感じたのか、静かに唸り声をあげて棍棒を強く握り直した。武器も魔法も使っていない人間如きが、こうして慣れたように自分へと向かってきている。例え猿並みの知恵しかないトロールにもプライドがあった。目の前の人間が自分を完全に舐め切っている。トロールにはそれが許せない。

「ガアアアアアアア！」

「うるせえぞ豚面あ！ ギャーギャー吠えりやいいってもんじゃねえ！」

互いに臨戦態勢に入る。剥き出しの野性が衝突。後一步踏み込めばトロールの棍棒が直撃する距離で、いなほはサンダルを脱ぐと、両手の拳に力を込めた。

健康的な小麦色の肌が筋肉で隆起する。盛り上がる筋肉は、いなほの肌を引き裂いて溢れんばかりの力強さだ。

敵を睨み、犬歯を剥いて奥歯を噛みしめる。相手は訳もわからない豚もどき。だがビビらない、ビビった奴が喧嘩で負けるのだ。

猛る気持ちとは裏腹に、構えは流麗、静寂の水面を彷彿とさせる静かな動作だ。体をトロールに対して真横に向け、右手を掲げトロールへと向ける。左手は腰に、重心を低くして、大地に根を張るように構えた。

トロールの間合いより一步、いなほの拳か足には二歩、あの棍棒の威力は、トロールの体格的に見たら脅威だろう。だがいなほがトロールに一撃を与えるには、まず棍棒の一撃を掻い潜らなければならぬのだ。

大人でも容易にミンチにするだろう一撃。だがそんな一撃を前に、いなほが感じるのは恐怖ではなく歓喜だった。近隣では最早戦う相手はいなかった。幼少より暴力に染まっていたいなほは、そんな現状に飢えていたのだ。自分と戦おうとする奴とのいつちまうくらいに楽しい喧嘩にだ。

だからやろう。すぐにやろう。もう言葉はいらない。本能の赴くまま、いなほは自ら死地へと飛ぶように右足から踏み込んだ。

大気の震えを産毛の一本一本で感じる。頭上を焼く殺意の奔流。違わず走るは魔獣の怒涛。

「ガアアアアアアア！」

待ち構えていたトロールの棍棒が振るわれる。魔獣の怪力の乗った棍棒の速度は、太った体躯に見合わず早い。

迫りくる正面衝突の悲劇。

描かれる脳漿の飛び出す地獄絵図。

だがいなほは、避けるでもなく、まだトロールを射程に入れていないというのに踏みとどまる。否、大地を陥没させる程の凶悪な踏み込み。そして大地を破砕する運動エネルギーが、足の裏から盛り上がった下腿を周り膝へ。

膝で跳ねた力はそのまま大腿を駆け登り腰へと集束。溜まった力を腰を捻じり加速させて射出し、さらに倍加した力はタンクトップ

を圧迫するほど肥大した広背筋へと威力を連絡する。

その間にも回転した腰に引っ張られるように、いなほの左手は空気の壁を突き破る勢いで走っていた。背筋に溜まった力は余すどころか肥大させて左肩へ。筋繊維をサーキットに駆け抜ける衝撃は、発射先である拳目がけて突き進む。

尚もスピードを速める拳を押し出すように、左足で大地を蹴る。限界まで高まったエネルギーは、最後の押し出しを持って遂に爆発した。

「オラア！」

トッピングは獅子の雄たけび。物理的な破壊力と闘争心を乗せた極限の左拳が、その異常な反射神経を持って疾走する棍棒へと着弾を果たす。

いや、それは最早爆撃と言っているレベルだった。魔獣の怪力すら凌駕する筋肉と技術のハイブリッドは、触れた瞬間に棍棒を容易く砕いたのだ。

言葉通り木っ端となった棍棒の残骸が空に散る。だが、トロールは驚愕する暇もなく、遅く過ぎる映像の中で、確かにいなほの顔を見た。

凶悪に笑う男のなんたる恐ろしさか。こんなのは人ではない。魔法による強化も使わずに、魔獣の一撃を力で完封する規格外の突然変異のその一連。

ゆつくりと動く世界で、いなほは既に次の行動に移っていた。振りぬいた左拳を軸に、独楽のように回転しつつさらに一步距離を埋めるは大地を蹴った左足。トロールにとっての危険地帯、そしていなほにとっての必殺の間合いに入り込む。

魔獣の脳裏を過る壮絶な死の予感。一回転しながら、いなほの右足が伸びあがる、勢いのまま回転が体を倒すことで変則、横から縦に、円を描いて虚空を切る足の踵が、ただそれを呆然と眺めるしか

できないトロールのこめかみ目がけて、

「うるああー！」

咆哮に合わせて、直撃した。

胴回し回転蹴り。いなほの巨体には見合わぬアクロバットな絶技がトロールの頭蓋にて発生した。歪な顔は踵のぶつかった部分を大きく凹ませ、余計にグロテスクな変貌をした。そのまま重力を振り払って飛んだトロールが、勢いのまま木にぶつかり盛大に幹を揺らしながら力なく大地に屈する。崩れ落ちるトロールは既に着弾と同時に絶命していた。

「ハッ……根性だけはよかったぜ豚野郎」

トロールの骸の前に近づき、いなほはそう吐き捨てた。加減なく放った自身の全力。命を一つ奪ったことに対して、いなほが感じたのは清々しい心地よさだった。

全力を出せば人が死ぬ。故に出せなかった全力を出せたことは爽快以外ない。まあ相手には運がなかったと諦めてもらおうと、いなほは両手を合わせて合掌。

「しかし……何だあ、この生き物は？」

もしかしたら猿の仲間かなんかなのだろうかと考えるが、生憎と考えるのが苦手ないなほは、一分も掛からずにどうでもいいかと結論した。どうせこいつは俺より弱い。ならそれ以上の意味はないはずだ。

切り替えは早く、とりあえずこういうときは埋めるのが礼儀なのかとよくわからん思考に至ったいなほは、早速トロールを埋めるための穴を掘ろうとした。

「って、随分ご機嫌な雰囲気じゃねえか」

だが、いなほの驚異的な闘争を嗅ぎわけける嗅覚が、どんどん自分の周りに集まってくる気配を敏感に感じ取っていた。草木をかき分け大地を揺らす、巨人達の群れの行軍。

木々に阻まれ見えないが、おそらく十に届く程度だろうか。姿を現すトロール達、怪力無双の魔獣の集団。粘りつくような殺意の奔流が、いなほの本能を直接刺激して、アドレナリンを分泌させる。

「ああ？ 仇取りに来るたあ気合い入ってんじゃねえの」

指の骨を鳴らしながら、いなほは自分を取り囲むように迫るトロールに向けて笑った。

面白い。ここが何処かもわからないが、自分に対して『調子のいい』野郎が吐いて捨てるほど現れるのは嬉しい限りだ。命のやりとりなど数える程しかやってないが、とどのつまり喧嘩と何一つ変わらないのは立証済み。

どっちもビビった奴が負けるのだ。

「行くぞオラァ！」

いなほは完全に周りを取り囲まれる前に、まずは真正面のトロールに突撃した。素手の人間の奇襲を予期していなかったのか、驚きたじろぐトロールへ「おせえ」と一言に合わせて、肥え太った腹に正拳突きを一撃。充分加速を伴った拳は、トロールの腹に深く入りこむと、まるでボールのようにその巨体を空に舞わせた。

血反吐を撒いて、トロールが地に沈むころには、新たなトロールを狙おうとしたいいなほ目がけて迫りくる二体のトロール。

「グオアアアアアア！」

「グラアアアアアア！」

「ハッ！ 絶頂だあ！」

高々と頭上に掲げられる二振りの棍棒。叩きつければ人間をたちまち弾ける血袋となす攻撃に応じるいなほの対応は、まさに常人の考えの外れだ。

「オオオ！」

変わらず落ちる木の塊を、いなほの両手ががちりと捕らえる。その衝撃にいなほの足首までが土に沈んだ。今まで感じたことのない強烈な重さに、いなほの両手がぶるぶると震える。単純な質量では圧倒的に負けるトロールの渾身を二つ、ただの身体能力でこれと拮抗するいなほの筋肉の異常は推して測るべきだが、少しずつ両手持ちの棍棒に押されて腕が下がり始めてきていた。

「俺、と、腕比べ、たあ、いいタマ、してやがる、ぜ……！ ぎい……！？」

歯を食いしばり、唸り声。盛り上がる両腕の筋肉は既に限界を訴え悲鳴を上げている。だが、普通ならトロールとの力比べなどというイカれた行動などせず、力を逸らすなりして棍棒をいなすのがこの場では最適な方法だろう。勿論いなほにはそれを成したうえで反撃する技量があるのだが、あえて彼はその選択を廃棄した。

男と男（？）の真っ向勝負で、力を逸らすなどというつまらない選択を選ぶなど馬鹿げている。

「アアアア……！」

だが内心の気合いとは裏腹に、いなほの膝は折れ、今にもトロール二体の怪力の前に屈服しようとしていた。その事実的喜悦を覚えたのが他ならぬいなほだ。自分が窮地であることこそが楽しいと思うその精神は、まさに戦闘者としての本能か。

浮かぶ笑み。攻撃的な歓喜が、押されている自慢の筋肉を刺激する。まだだ、この程度で俺が屈するわけがない。これ以上ないと思われた筋肉の肥大がさらに起こる。いなほの筋肉が、まるでアクセルを踏み込み勢いよく回転しだしたエンジンのように発熱し、あまりの熱量に蒸発する汗が湯気となって体から舞い上がった。熱した鉄か何か、人類の規格を凌駕した筋肉は、今まさに鋼の如き変貌をなしていた。

「グギヤ！？」

トロールが困惑の声を出す。押しこんでいたはずの棍棒が、何故か徐々に自分のほうへと押し返されている事実が二体の怪物に驚きを与えていた。

そして驚愕を叩きつけた本人はといえば、膝を持ち上げ、腕を突き出し、そして一気に棍棒を押し返したところで、幼い子どもの胸程度はある棍棒をただの握力だけで握りつぶした。

「ハッハー！ 最高だあああ！」

頼りの武器を失った二体にいなほは飛びかかると、鋼の腕で首にラリアットをかました。分厚い皮と脂肪と骨に守られているはずのトロールの首が、それ以上の硬度を持つ肉体の爆撃によってたまらず破砕。一撃で命を刈り取られたトロール二体が沈むといなほも着地。さらに前には三体のトロール。焦らず中央の奴の懷に潜り込み、

鳩尾に拳を叩きこむ。

三度吹き飛ぶトロール。いなほは吹き飛んだ奴には目もくれず、左右にいる魔物を交互に睨んだ。戦いに飢えた獣の眼に見据えられ、頭の鈍いトロールですらようやくいなほという化け物が、自分達を大きく上回る戦力を持つことを理解した。

恐怖から、後ずさるトロール。だが既に戦意を失ったところで、全力での戦いに酔ういなほが攻撃の手を休めるわけがない。次はどいつをぶっ飛ばすか。両手を大きく広げて拳を作る。

「次い……よおやくよお。俺の小せえ脳みその奥のほうがギンギンしてきたんだ。もっと派手に決めようぜ」

左右に目配せ。ぶん殴りにこいと、あえて挑発するいなほだが、行けば死ぬのが確定している死地へ行こうとする程トロールは馬鹿ではない。

残された手段は少なく、故にトロールは、何も考えず尻尾を巻いて森の奥へと逃げ出した。

あまりにも唐突な戦いの終わりに、暫くいなほは馬鹿みたいに口を開けて遠くなっていくトロールの足音を聞き続ける。だが次第にその体がわなわなと震え、遂に爆発した怒りのままに地面を思いつきり踏みつけた。

「テッ……メエラアアア！ それでもタマあ付いてんのかぁ！」

激昂。野獣のような絶叫をあげて、いなほは自分の左側にいたトロールに狙いを定めて走り出す。

まだまだ戦い足りないのだ。欲求不満で憤る心のまま、いなほは深い森の中を足音目がけて疾走を始め、

「見つけた……！」

その途中、運よく立ち止まったトロールを見つけて、いなほはそいつ目がけて襲いかかった。

第二話「ヤンキーばんち」(後書き)

次回、少女とヤンキー

第三話「ヤンキーと少女」

「おい。何ガキに手えだそうとしてんだよ」

え、と疑問を口に出す。涙で滲んだ少女の視界に、トロールとは違う、不思議な出で立ちの男が立っていた。トロールより低い、充分に大きな体と、細いように見えて、綺麗な調度品のような筋肉は、太陽の光を反射して何故か神々しく感じた。

強い意志の籠った目は、変わらずにトロールへと向けられている。そして少女を掴むはずだったトロールの醜くぶよぶよとした腕は、男の逞しい腕に掴まれ、それ以上少女へ近づくことができなかった。

「ギャギャギャ!？」

トロールの混乱は、突然の乱入によるものではない。たかが人間の腕の力で、自分の腕を全く動かすことができないことに混乱していた。怪物にとっての悲劇は、先程の戦いに参戦しておらず、男、いなほの能力を知らなかったことか。

だが万力のようなだったいなほの手が突如緩められてトロールは拘束から脱することができた。掴まれた部分はうっ血しており、緑色の皮膚にいなほの手形がくつきりと残っている。

「ガアアアアアア!」

トロールが怒りのままに咆哮した。叩きつけるような声を聞き、少女はたまらず耳を塞いで縮こまる。そんな少女を庇うように、トロールとの間にいなほは立ち塞がった。

「あ、あの……！」

少女は、武器も持たず、魔法も使おうとしないいなほに危ないと声をかけようとしたが、恐怖から上手く声を出すことができない。いなほは少女に振り向くことはせず、ただ拳を天高く突き上げることで応じた。鉄塊を思わせる拳を少女は目で追う。光に濡れるそれはやっぱり綺麗で、見ているだけで体を捕らえていた恐怖の鎖が解かれていく。

「ガアアアアアア！」

だがそんな少女を現実に戻すのはトロールの雄たけびとこちらに迫る地鳴りのとき足音だ。巨体を揺らし襲いかかるトロールに対し、いなほは掲げた拳を腰ために、迎え撃つように腰を落とした。

「危ない！」

少女の悲鳴は当然だ。普通、トロールという魔獣を打倒するためには、装備を整えた兵士が数人、または熟練の冒険者でなければ打倒が難しいとされる生き物である。

だというのに、目の前の男は、肌の露出の多い衣服しか身に付けておらず、武器もなければ魔法を使う気配すらない。

言ってしまうえば生身一貫、己の肉体のみで肉体という点で人間を凌駕するトロールと対峙しているのだ。

「おう、ありがとう」

少女の叫びに、いなほの返事は場違いなまでに軽い。そこらに散歩にも行く気軽さだ。だが少女の悲鳴が当然ならば、いなほの余

裕もまた当然。ここに至るまでに、何匹ものトロールを葬りたいなほからすれば、今更一体どうしたところではない。

見慣れてしまった棍棒が頭上より来る。いなほは慣れた動作でそれを避けると、対象を失い前のめりになるトロールの顔面に、カウンターの拳を突き出した。

「そらあ！」

巨体を持ち上げ、拳は振り切られた。まるで体重がないかのように吹き飛ぶトロールが木と接触し崩れ落ちる。少女は人類が力で勝る魔獣に単純な力で勝った事実を目を見開いた。

「凄い……」

他に出る言葉がない。「チツ、野郎ども完全に逃げやがったか」
「ばやくいなほを、少女は驚愕一転、今度は神聖なものに祈る巫女のように羨望の眼差しを向けた。」

「本当に、勇者様」

「あっ？」

声に釣られて、ようやくいなほは膝をついたままの少女を見た。
向けられる視線に込められた尊敬を感じてか、いなほはむず痒そうに頬を掻く。「あー……」何か言おうとするが、生憎と女さらにかギの対応なぞしたことのないいなほは、何を言っていないかわからず、とりあえず手を差し出した。

「立てよ。いつまでもケツ汚す必要はねえだろ」

「あつ……」

慣れないことに恥じているいなほの赤い頬を知らず、少女は差し出された大きくて固そうな掌に視線を移した。

たくましくて、鋼のように堅牢だというのに、大樹のごとき安心感のある無骨な手。少女はいなほの手をマジマジと見てから、次いで自分の掌を見た。土で汚れ、畑仕事と毎日の家事でひび割れかさついた自分の手。目の前の強くて傷も知らない鋼の手と比べ、なんと汚く、弱いのだらう。

そんな自分の手で、はたしてこの手を握っていいのか。逡巡する少女に、いなほはしびれを切らしたのか、その手を無理矢理掴んだ。

「ひゃ……！？」

強引に立たされると、少女はいなほの大きさを改めて認識した。トロールに比べ低くはあるが、それでも充分人間にしては巨大な体躯と、その体がまとう細くしなやかな筋肉は、パツと見は確かに鍛えて入るが、トロールを打ち倒せるほどには見えない。だが、間近で見た今ならわかる。皮膚の内側の筋肉は、一本一本の繊維すら感じられるほどの力強さを放っていた。一体どんな鍛錬をすればこの境地にいたるのかわからない。

「やつぱし、勇者様だ」

だから少女は確信した。家に唯一あるおとぎ話の絵本。そこに描かれていた悪を打倒する強き正義の勇者。それが彼なんだと少女は信じた。

「勇者あ？」

だが言われた当人であるいなほとしては意味不明である。偶然助けた女が、何を思ったのか自分を勇者と呼び潤んだ眼差しでこっちを見ている。

とりあえず、立ち上がった少女が日本語を話していることに感謝した。天然だろう肩まで伸ばした金髪と、緑色の大きな瞳に、形のよい高い鼻、そして透明感のある白い肌の少女は、いなほの胸よりやや低い背丈しかなく、見た目の幼さと相まって、そこそこに可愛い少女ではあるが、いなほ的には後数年先に期待といった感じである。おそらく十四、五歳程度といったところか。ともかく、そんな見た目であったため、まさか会話が通じるとは思わなかったのだ。それにしても田舎っぽい服装である。使い古されてよれよれのシャツと、足もとまで隠すぼろぼろのスカートとは、まだいなほの服のほうが丈夫であろう。靴もぼろぼろで、ただ底がある程度といった感じが。

まさか初めて会った人間が（いなほとしてはトロールは豚の進化系ではない）ホームレスとは、内心少女に対して失礼なことを考えながら、まずはとばかりに、少女の手を握ったまま、力加減に気を付けてもう少し力を込めて握った。

「いなほだ。早森いなほ、俺の名前な。テメエは？」

「えっ！？ あっ……わ、私はエリス、です……あの、助けてくれて、ありがとうございます！」

少女、エリスは言い終わると同時に頭を勢いよく下げた。手を離したいいなほは「まあそりゃついでだから氣いすんな」などと感謝にむず痒そうにして眉をひそめ、照れ隠しを呟く。

流石勇者様、謙遜するなんてなんと奥ゆかしい。などと、エリスは勘違いをする。だが実際彼女の目の前にいるのは、勇者などという強く優しく凛々しい人ではなく、気合いと根性と喧嘩が大好きで

しかない場末のヤンキーでしかないのは何たる皮肉か。

「とりあえずよ、ここが何処かさっぱりなんだ。エリス、どうか近くの町まで道案内頼むわ」

「道案内……そうだ！ 皆！？」

突如、エリスはこれまで見せていた安堵の表情を青ざめさせた。そして弾かれるように走り出そうとして、足首から走る痛みにはバランスを崩しその場に倒れた。

「オイ！」

慌ててその体を抱きとめる。そこでいなほはようやくエリスが足首を痛めていることに気付いた。

「っ……村に、皆が……！」

「なんだかわからねえが、村にいきでえのか？」

エリスはいなほの問いに頷く。「あの……」お願いだから村の皆を助けて、そう続けようとしたエリスの頭に、いなほはその大きな掌を乗せた。

「理由は知らねえ。だが、状況は理解してるつもりだ。あの豚、お前の村に来たのか？」

「は、はい」

「任せろ」

掻き毟るように、エリスの頭をなでると、荷物を持つかのようにいなほはエリスの体を肩に担いだ。

「わわ！」

いきなり高くなった視界にエリスがたじろぐ。その反応が可笑しくて、いなほは口を弧にして笑った。

「んじゃ、道案内は任せたぜエリス」

「は、はい！」

コクコクとエリスが応じて指を指した方角に向けていなほが駆け出す。

その一歩こそ新たな門出。不倒不屈の不良の冒険が、今始まる。

第三話「ヤンキーと少女」(後書き)

次回、ハイパーグロタイム

第四話【ぶつつんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり（前書き）

タイトル通りキツイ表現があるので閲覧には気をつけてください。

第四話「ぶつつんヤンキー魔獣狩り」　グロ表現あり

「皆……！」

いなほの肩に担がれたエリスは、指をさして村の方向を示しながら、はぐれてしまった家族と友人を思い、焦燥感に駆られていた。森をまるで猿のような軽快さで駆けるいなほも、そんなエリスの横顔を見て、一層速度を速めた。

喧嘩で熱くなった思考はすっかり冷えている。改めて言えば、あのトロールはこれまでにいなほが戦った生物で一番強かった。それでもいなほの敵にはならなかったが、問題なのは、あれが複数来た場合、はたして普通の人間が相手できるのかということだ。

いなほの中でトロールの位置づけは拳銃で武装した人間よりも高い。走りながら、先程エリスの気晴らしになればと考えトロールのことを聞いたが（この状況の当事者についての話をする時点で気晴らしにはまるでならないが）、どうやらトロールはＨランク相当の敵で、一体倒すのに武装した兵士が幾人も必要らしい。

そんな魔物が群れで襲ってきた。頭の悪いいなほだが、野獣の如き本能が状況が危険であることだけは理解した。

「間に合えよ……！」

加速しながらも、木々にエリスが当たらないように気を配りながら進むいなほ。エリスの焦りをわかるからこそ、彼の内心は逆に冷静になっていた。そして、話を聞いた上で、最悪な状況も脳裏に描く。

そして、遂に抜けた森の先に広がる光景は、いなほが思い描いた以上に最悪な結果そのものだった。

視界一杯に広がるのは、質素でありながら、それでも穏やかな空気と、暖かな人達が暮らしていたエリスの生まれ育った村の姿ではない。そこにあるのはトロールの群れによりなすすべなく蹂躪され、荒れ果てた村のなれの果てだ。

家屋は倒壊し、作物等を育てていた田畑は荒れ果て、その崩壊した村を、優しかった村人ではなくトロールが闊歩していた。その周りには村人達の見るも無残な死骸が転がっている。一撃で頭を砕かれた死体は、まだ幸せなほうだったかもしれない。

手足を潰された少年の苦悶に満ちた残骸。

破られ、最早身にまとう衣服ではなくただの布切れを体に羽織り、トロールであろう汚い体液に穢された、この世で最悪に近い蹂躪を受けて絶命した少女の骸。その周りには少女とおなじように、トロールに嬲られ死んだだろう女達の死体が積み重なっていた。

張り付けにされて体中を殴られ死んだ者もいた。

もう死んでいるのにトロールに振り回され遊ばれている者もいた。

棍棒の代わりに使われ、それを持ったトロール同士の試合に使われている者もいた。

「あ、うあ……」

エリスはそこまで見て、これ以上見るのに耐えられず嗚咽を漏らしながら目を閉じた。

トロール達は笑っている。下衆な鳴き声を轟かせて、村人達が大切に育てた食料を乱暴に食べ散らかし、村人達を『遊び道具にして』笑っている。

これが魔獣だ。人間が恐怖する魔獣の姿だ。躊躇なく人にとっての絶望を振りまく最悪の天敵。

「う、うえ……」

肩に担がれたままのエリスが、我慢できずに嘔吐した。手で押さえるが、溢れた内容物はいなほの体を容赦なく汚した。だがエリスにはそのことを謝罪する余裕もなかった。手で押さえる気遣いが出ただけでも上等だ。

そしていなほは、体を汚されていることを気にする余裕もなく憤怒していた。

「テメエら……テメエ……テメエら……！ やったな……やりやがったな……！」

エリスが目を瞑っていたことは不幸中の幸いだっただろう。もし今少女がいなほの顔を見ていれば、あまりにも壮絶な陰相い意識を手放していたに違いない。最早、いなほの形相は鬼のそれだった。だがどうにか残る理性でエリスを下ろすと、蹲る彼女には目もくれず前に、地獄を具体した村へと踏み込む。

いなほは生まれてこのかた死体を見たことは片手で数える程度にしかない。それですら事故にあつた仲間や、抗争の結果頭を強く打つなどして運悪く死んだ奴と言った程度だ。このような直視すら難しい死体を見たことはない。なら普通はエリスのように吐いて、泣いて、蹲って、どうしようもない現実には打ちのめされるはずだ。

だがいなほは怒った。悲惨に憤怒し、激昂した。体の内側から沸き起こる感情の波は、いなほはひたすら前へと押し出す。気分を速度で表すなら既に音速は振り切った。白熱する鼓動と、連動して盛り上がる血流、五臓六腑を疾走する音速の鮮血は、いなほの骨と肉に際限なく沁み渡り起動を促す。

心臓がライブハウスのバンドの音楽のように五月蠅い。だが騒音のビートが今の自分には似合っていると頭の片隅でいなほは思った。なんせこのゲロを吐きたくなるような状況だ、狂った音が相応しい。

「ゴキゲンだ……随分とユカイな光景じゃねえか……！」

吐きだす吐息も熱を帯びている。浮かぶ笑みと言葉とは裏腹に、赤く沸騰するマグマのような心は奴らへの絶殺をすでに確定していた。

ようするに、いなほはこの状況に驚くでも怖がるでもなく、単純に『キレてしまった』のだ。

眼下の地獄へゆつくり歩み寄る。いなほの周りに浮かぶ怒気に感付いたのか、村で好き放題していたトロール達が一齐に森から現れたいなほを見た。

「ここが何処かもわからねえ。お前らが何なのかもわからねえ。でもよ……」

一步一步、踏み出す足はサンダルを脱ぎ棄てている。素足のままの歩行は、その一踏みごとに大地を揺らし、土を抉っている。土に沈む足はまるで雪原を歩いているかのような。それほどの踏み込みで歩くいなほの心境は、最早筆舌も出来ない。

燃えるような怒りを、殺戮を決定した筋肉が指し示す。抉れる大地は貴様らだと、足蹴にせんといなほが行く。

語るまい。告げる言葉は後一言だ。

「瞬殺だぜテムエらああああ！」

言葉に偽りは無い。初速で最速、大地を抉る脚力の踏み込みは、いなほの近くにいたトロールにあった十メートルの距離を瞬く間にゼロにした。

そのトロールからしたら、まるでいきなりいなほが消えたように見えただろう。懷に潜り込んだいなほは、握りこんだ拳を腰だめにする、バネ仕掛けのごとき勢いでトロールへと解き放った。

吹き飛ぶ　であつたらまだよかっただろう。トロールの腹に直

撃したいなほの拳は、その肥え太った腹を貫通していた。背骨も砕き背中から飛び出た拳にまわりつく生温かく、腐臭を放つ臓腑を意識もしない。回復は絶対にさせないとばかりに、捻じりながら拳を引き抜くと、空いた穴から血が噴き出していなほを染めた。しっかり赤いじゃねえか。狂喜するいなほは鮮血を頭から浴びて嘲る。

「ガアアアアアアア！」

そこでようやく他のトロールも気付いたのか、二十を超える魔獣の群れが同胞が死んだことに憤り咆哮する。それまで遊び、または蹂躪していた村人をゴミのように放り出す様に、いなほの怒気がさらに膨れ上がった。

その尋常ではない狂気に気付くことはない。本来なら有象無象の人間など、トロールにとって相手ではなかったはずだ。だが、この瞬間大勢は決まる。刈られる対象こそが己だと理解した時には、トロール達は全ていなほの人間の範疇を超えた理不尽すぎる筋力の暴虐によって、ものの十分もせずに壊滅するのだから。

殲滅に至る過程には意味はない。逆に蹂躪される側になったトロール達は、先程森でいなほの強さに怯え逃げた者と同じように、半数が容易く葬られた時点で逃げ出した。だが怒りに猛るいなほはその超人的な脚力で、鈍重なトロール達に追いつき、今度こそ逃がすことなく殺し尽くした。

「ふっ……ふっ……はああ……」

流石に疲れたのか、顔に付着した血を拭いながらいなほは肩で息をして、周囲への警戒を行いながら呼吸を整えた。村にはトロールと村人の死骸が転がっている。戦いの最中、周囲に無事な人間がいるか確認したものの、無事に思える人は確認できなかった。

だがもしかしたら家屋の中にもいるかもしれない。

「……その前に、だな」

いなほは森の手前で未だ蹲るエリスへと歩み寄った。
体を震わせ、亀のように縮こまる少女の肩を叩こうとして、その
手が赤く染まつてることに気付き、寸でで止めた。

「おい」

変わりに、彼にしては比較的穏やかに（普通の人からしたら威圧
的ではあるが）声をかけた。

だがエリスからの返事はない。何事かを呟きながら、一向に顔を
上げようとはしなかった。

「……あいつらをあのままにはしておけねえからよ。墓あ作るから
何かあったら呼べ」

かける言葉が見つからないとはこのことだろう。普段相手にして
いる悪ガキなら叩いて無理矢理起き上がらせるが、相手は少女、し
かも育った村の人間が蹂躪されているのを見たとなれば話は別だ。
居づらそうに眉を潜めたいいなほは、辺りを警戒しながらも、トロ
ールの持つていた棍棒を拾い、素手で真ん中から『引き裂く』と、
適当に開いた空き地で裂いた棍棒をスコップ代わりにして穴を掘り
始めた。

「つたくよ。俺ア何やってんだかね」

事故にあったと思ったら、よくわからん奴のいるよくわからん場
所に飛ばされ、少し話したと思ったら光に包まれ。そして光が収ま
ったと思えば森の中、さらに見たこともない巨大で醜い豚もどきと

の盛大な殺し合い。

「それで、やったこともない墓作りたあ、俺もヤキが回ったか」

水でも掬うかのような手軽さで土を掘りつつ、自分の境遇に苦笑する。これまでも喧嘩に明け暮れた生活だったために、決して平凡な人生だったとは言えないが、こつも滅茶苦茶なことは人生で初めてだ。

あつという間に一人分の穴を十個作れば、空き地に穴を掘るスペースはなくなってしまった。とりあえず掘った分だけ埋葬しよう、そう決心したいなほが振り向くと、そこには未だ泣きながらも立ち上がり、足を引きずりながらもいなほの傍に近づくエリスがいた。

「あー……大丈夫か？」

すぐ傍に来たエリスは、下を向いていなほを見上げようとはしない。

だからガキかつ女は苦手なんだ。髪を乱暴に掻き毟り、二の句を告げようとした瞬間、エリスは勢いよく顔を上げた。

「あ、あのー！」

「お、おおー？」

身を乗り出しながら叫ぶエリスの迫力に、さしものいなほも驚いたのか一歩後ろに後退した。

エリスの瞳は、さっきまで蹲っていたとは思えないくらい強い意志が見て取れた。いなほが穴をせっせと掘っている間に一体何が起こったというのか。

「私も、私にも手伝わせてください」

「手伝わってーと……墓か？」

「は、はい」

何度も頷くエリスに、いなほは先程と違った驚きを感じていた。何か知らないが、必死に目の前の死を受け止めたのだろう。そのいなほより遥かに小さく、弱弱しい細い体で、親しい人と、住み慣れた村の破壊を見て、しかし立ち上がった。

内心を知ることとはできない。おそらくはやせ我慢だろうし、ただ単純に現実を理解することを手放しただけなのかもしれない。でも、立ち上がったことは事実で、いなほはエリスに最初感じた弱いというイメージを訂正した。

彼女はその心の在り方が強いのだ。

だからこそ、少女の下した決断に対して、いなほは確然とした態度で、

「駄目だ。足怪我してんだ、邪魔だから失せろ」

そう言って、エリスの足首を指差した。

「あつ……でも、私……」

言われて、確かにただでさえ肉体労働もできないのに、足を怪我しているとなれば、邪魔以外の何者でもない。

それでも何かしたいと目で訴えてくるエリスに、困った風になほは頬を掻いた。

「思ってる……」

「え？」

「死んだ奴らを、思っ てやれ」

目をまん丸に見開いて、エリスはいなほの言葉を聞く。

柄にもないことをしたな。いなほは恥ずかしさを隠すようにエリスに背中を向けると、空いてる空き地に向けて逃げるように歩き出した。

第四話「ぶつつんヤンキー魔獣狩り」 **グロ表現あり（後書き）**

次回、暫くの世界説明

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6548y/>

不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

2011年11月20日16時32分発行